

本研究は、日米で塗り絵を採取し、それをもとに日米の人々における色彩感覚や配色の好みを調査した。これまでの文化心理学の研究は、東洋と比べて西洋では主体性が重視され、しかもこの文化的な価値観と一致し、西洋における人々は東洋における人々よりも独自性の高いものを好むことを示している (Kim & Markus, 1999)。また、色彩に関する比較文化研究によると、日本人は明るいトーンの色を、デンマーク人は暗いトーンの色を好む (Saito, 1996; 富家・齋藤・柳瀬, 1980)。これらの知見に基づき、本研究では、1) 日本産の塗り絵の色のトーンは、アメリカ産の塗り絵と比較し、より明るく、2) アメリカ産の塗り絵は、日本産の塗り絵と比較し、その文化的価値を反映し、ユニークであると評定されやすく、3) 人々は当該の文化的価値を反映した塗り絵を好み、日本人は日本産の塗り絵を好むのに対し、アメリカ人はアメリカ産の塗り絵を好む、4) とりわけアメリカ人は、よりユニークなものをより好み、塗り絵のユニークさと好みは正の相関を示すと予測した。加えて、自己よりも周りの他者について考えた場合に、好みやユニークネスに関する予測のパターンはより顕著に見られるという可能性についても、日本人参加者を対象に探索的に調べた。

以上の仮説を検証するために、研究1では、日米の参加者に数種類の図形のパターンを見せ、好きなように色を塗らせた。そしてその塗り方をいくつかの基準に沿ってコーディングし、分析した。研究2では、研究1で得られた日本産とアメリカ産の塗り絵を2枚1組にして、研究1とは別の日米の参加者に提示し、自分もしくは周囲の他者がより好むもの、さらにはユニークだと思うものを選んでもらった。

結果は、仮説と一致したものであった。研究1より、日本産の塗り絵の色のトーンは、アメリカ産のものより高いことが示唆された。また、研究2では、日米の参加者はともに、日本産の塗り絵と比較し、アメリカ産の塗り絵はユニークであると判断した。さらに日米それぞれの参加者は自文化の塗り絵を好み、しかもアメリカ人においては、塗り絵の好みとユニークさの判断の間に正の相関が見られた。なお、アメリカにおける参加者には、東アジア出身の留学生のグループが含まれていたが、そのパターンは日本人におけるものと類似していた。そして日本人におけるこのような結果は、自己と他者いずれの場合も同様に見られた。

配色の選好における比較文化研究はほとんど前例がないため、本論文の研究は意義のあるものといえるであろう。